

## 介護福祉士養成教育における介護過程の展開に係る用語の実態と課題

静岡県立大学短期大学部

高 木 剛

### I. 緒言

介護福祉士を養成する四年制大学、短期大学、専門学校（以下、介護福祉士養成施設という。）においては、「介護福祉士養成施設の設置及び運営指針」<sup>1)</sup>を踏まえ、「求められる介護福祉士像」を基盤として、「人間と社会」、「介護」、「こころとからだのしくみ」、「医療的ケア」の4領域とそれらを構成する計15の教育内容を踏まえた科目設定が求められる（計1850時間）。このうち、本研究で取り上げる介護過程（150時間）は領域「介護」に位置づけられ、教育内容のねらいとして、「本人の望む生活の実現に向けて、生活課題の分析を行い、根拠に基づく介護実践を伴う課題解決の思考過程を習得する学習とする」ことが掲げられている<sup>1)</sup>。また、教育に含むべき事項として、介護過程の意義と基礎的理解、介護過程とチームアプローチ、介護過程の展開の理解の3項目が設定されており、それぞれに「留意点」が示されている<sup>1)</sup>。

介護過程は利用者に対する介護実践の根幹をなすもので、介護福祉士の専門性の中核をなすと解されている<sup>2) 3)</sup>。介護過程の展開プロセスは、「介護福祉士国家試験科目別出題基準」<sup>4)</sup>に倣うと、「アセスメント」、「計画立案」、「実施」、「評価」からなる。しかし、これらに関する用語は必ずしも統一されておらず、介護福祉士を目指す者（特に、日本語が母国語ではない留学生）にとって当該科目の内容を理解する妨げになる恐れがある。実際に、介護福祉士国家試験に係る用語で留学生が難しいと感じているものとして、表記の揺れや類義語などが挙げられている<sup>5)</sup>。また、類似

した用語が複数あることにより、介護福祉という学問分野の発展・普及の足かせになる恐れもある。これに関連する指摘として、「難解で多様な学術用語を整理・統一し、平明簡易なものとすることが学術の進歩とその正しい普及にとって極めて重要である。一部の学会では、学術用語の見直しに向けた独自の検討を進めている」（文部科学省、2016）<sup>6)</sup>が挙げられる。さらに、様々な用語が何に準拠しているのか不明瞭であることも、前述のような課題を助長させることに繋がりがかねない。

このような問題意識のもと、本件に係る先行研究について、2019年度から順次導入された新カリキュラムにおける介護過程を対象としてCiNii Researchで検索したが、該当するものは確認できなかった。強いて挙げるならば、遠藤ら（2016）<sup>7)</sup>、青柳（2019）<sup>8)</sup>が内容的にやや近いが、旧カリキュラムのものであるうえ、介護福祉士養成施設における介護過程の用語の実態（教授されている用語の種類やその拠り所となる資料等）を明らかにしたものではない。

そこで、本研究では介護福祉士養成施設における新カリキュラムでの介護過程の展開に係る用語の実態（教授されている用語の種類やその拠り所となる資料等）を明らかにし、課題と今後の展望について考察した。

### II. 研究方法

#### 1. 検索方法

日本介護福祉士養成施設協会<sup>9)</sup>に加入している全国の介護福祉士養成施設（四年制大学58校、短期大学55校、専門学校200校）から180校を

無作為抽出し、うち、シラバス検索システムで介護過程のシラバス（新カリキュラム）を確認できた142校（計499科目）を調査対象とした。

2022年12月1日～2023年7月10日に介護過程のシラバス（新カリキュラム）に記載されている授業計画から、「介護福祉士国家試験科目別出題基準」<sup>4)</sup>の介護過程の展開プロセス（「アセスメント」、「計画立案」、「実施」、「評価」）に則り、用語を抽出・分類した。なお、「アセスメント」については、さらにその構成要素として、「情報収集」、「分析」、「ニーズの明確化」、「課題の抽出」に細分化した<sup>4)</sup>。

用語の抽出・分類は科目単位で行い、同一の介護福祉士養成施設で複数の科目が設定されている場合（例えば、介護過程Ⅰ、介護過程Ⅱ、介護過程Ⅲなど）でも、科目ごとに用語が異なる可能性があるためこれらの全ての科目を対象とした。また、一つの科目内に異なる用語が複数ある場合は、それぞれを1科目としてカウントした。例えば、介護過程Ⅰという科目のシラバスにおいて、「アセスメント」、「情報収集」、「介護計画の立案」という用語が使用されている場合は、それぞれ、「アセスメント」（1科目）、「情報収集」（1科目）、「介護計画の立案」（1科目）として計上した（ただし、同じ用語が当該シラバス内の複数箇所で使用されていても、その数に関わらず1科目とした）。

なお、用語の整理にあたっては、紙幅に限りがあるため2科目以上を記載した。

## 2. 分析方法

また、上記の用語が何を準拠としているのかを検証するために、「介護福祉士養成施設の設置及び運営指針」<sup>1)</sup>、「介護福祉士国家試験科目別出題基準」<sup>4)</sup>、並びに介護福祉士養成施設で使用されている新カリキュラム用の介護過程テキスト（T社）の記述内容と比較した。なお、新カリキュラム用の介護過程のテキストは、現在T社のみである。

## 3. 倫理的配慮

本研究は人・動物を対象としていない。本研

究では公開されているデータを使用した<sup>3)</sup>が、その際に記事事実をそのまま用いるとともに、分析対象が特定されないように配慮した。また、引用文献については出典を明記した。

## Ⅲ. 介護福祉士養成教育課程における介護過程の位置づけ

介護福祉士養成教育課程（1850時間）は、「求められる介護福祉士像」を基盤として、「人間と社会」、「介護」、「こころとからだのしくみ」、「医療的ケア」の4領域とそれらを構成する計15の教育内容からなる<sup>1)</sup>。このうち、介護過程（150時間）は、領域「介護」に位置づけられ、教育内容の「ねらい」として、「本人の望む生活の実現に向けて、生活課題の分析を行い、根拠に基づく介護実践を伴う課題解決の思考過程を習得する学習とする」ことが掲げられている。また、「教育に含むべき事項」（3項目）として、表1に示した①～③が設定されており、それぞれについて「留意点」が示されている。

ところで、介護過程の展開は利用者に対する介護実践の根幹をなすもので、介護福祉士の専門性の中核をなすものと解されている<sup>2) 3)</sup>。介護過程の展開プロセスは、「介護福祉士国家試験科目別出題基準」<sup>4)</sup>に倣うと、「アセスメント」、「計画立案」、「実施」、「評価」からなる。

「アセスメント」とは、一般的に利用者の全体像を様々な視点から把握（情報収集）し、得られた情報からその利用者にとってどのようなニーズがあるのかを分析して、ニーズを明確にすることであると解される。「介護福祉士国家試験科目別出題基準」<sup>4)</sup>に倣うと、「アセスメント」の構成要素として、「情報収集」、「分析」、「ニーズの明確化」、「課題の抽出」が含まれる。

「計画立案」とは、利用者の生活上のニーズを満たすための計画づくりをすることであると解される。計画づくりでは目標と期間を設定し、利用者の生活上のニーズを満たすための方法や留意事項などについて具体的に明記する。

「実施」とは、立案した計画に沿って、実際に

利用者に対して介護を提供することであると解される。通常、実施している間は定期的にモニタリングが行われ、計画どおりに介護が提供されているか、新たなニーズが生じていないかなどを確認する。

そして、「評価」とは、実施によって計画で設定した目標を達成できたかどうか（利用者の生活上のニーズが満たされたかどうか）を検討することであると解される。

#### Ⅳ. 介護過程のシラバス（新カリキュラム）から抽出した用語の分類

介護福祉士養成施設（142校）におけるシラバス（新カリキュラム）を検索し、介護過程の授業計画に記載されている用語を介護過程展開のプロセスごとに抽出・分類したところ、表2の結果となった（ただし、紙幅に限りがあるため用語は2科目以上で使用されているものを記載）。

表2のとおり、「アセスメント」に関係する用語として、アセスメント（286科目）が最も多かった。構成要素ごとに見ると、「情報収集」については情報収集（235科目）、情報の整理（40科目）であった。また、「分析」では、（情報の）解釈・関連づけ・統合化（79科目）が最も多く、次いで生活課題の分析（35科目）、情報の分析（34科目）などの順であった。「ニーズの明確化／課題の抽出」については、課題の明確化（46科目）が最も多く、次いで生活課題の明確化（29科目）、生活課題の抽出（27科目）などの順であった。

次いで、「計画立案」に関する用語としては、介護計画の立案（156科目）が最も多く、次いで計画の立案（71科目）、介護計画の作成（36科目）などの順であった。

次いで、「実施」に関する用語としては、実施（123科目）が最も多く、次いで介護の実施（39科目）、介護計画の実施（22科目）などの順であった。

次いで、「評価」に関する用語としては、評価（196科目）が最も多く、次いで、介護計画の評価（21科目）、介護過程の評価（6科目）の順であった。

上記の各用語については、それぞれ内訳（類似する用語を含む）を表2に整理した。

#### Ⅴ. 「介護福祉士養成施設の設置及び運営指針」<sup>1)</sup>、「介護福祉士国家試験科目別出題基準」<sup>4)</sup>並びに介護過程テキスト（T社）との比較

介護過程の展開に係る用語について、「介護福祉士養成施設の設置及び運営指針」<sup>1)</sup>、「介護福祉士国家試験科目別出題基準」<sup>4)</sup>、並びに介護福祉士養成施設で使用されている介護過程のテキスト（T社）と比較した結果、以下のことが明らかとなった。

「介護福祉士養成施設の設置及び運営指針」<sup>1)</sup>における介護過程のねらい等については、表1に示したとおりであるが、ねらいの中で、「本人の望む生活の実現に向けて、生活課題の分析を行い、根拠に基づく介護実践を伴う課題解決の思考過程を習得する学習とする」ことが明示されている（太字で下線を引いてある箇所は筆者による）。当該用語は、表2のとおり介護福祉士養成施設（142校、計499科目）のうち35科目で確認されており、これらは本指針に準拠している可能性がある。

他方、「介護福祉士国家試験科目別出題基準」<sup>4)</sup>では、介護過程の大項目として「1. 介護過程の意義と基礎的理解」、「2. 介護過程とチームアプローチ」、「3. 介護過程の展開の理解」の3つが掲げられており、それぞれに対応する中項目と小項目が示されている（表3）。このうち、「1. 介護過程の意義と基礎的理解」の中項目の一つとして、「2）介護過程を展開するための一連のプロセスと着眼点」が示されており、さらに小項目では、「アセスメント（意図的な情報収集・分析、ニーズの明確化・課題の抽出）」、「計画立案（目標の共有）」、「実施（経過記録）」、「評価（評価の視点、再アセスメント・修正）」が明示されている（表3）（太字で下線を引いてある箇所は筆者による）。このうち、「アセスメント」、「情報収集」、「計画立案」、「実施」、「評価」の用語は、表2のとおり比較的多数を占めてい

るが、「分析」（4科目）、「ニーズの明確化」（4科目）、「課題の抽出」（16科目）の用語はどちらかと言えば少数である。したがって、介護福祉士養成施設（142校、計499科目）における介護過程の展開に係る用語については、必ずしも本基準に準拠していないことが伺える。

さらに、介護過程のテキスト（T社）では、「アセスメント（情報収集）」、「アセスメント（解釈・関連づけ・統合化）」、「介護計画の立案」、「介護の実施」、「評価」と記載されている（太字で下線を引いてある箇所は筆者による）。このうち、他に見られない特徴的な用語は「（情報の）解釈・関連づけ・統合化」である。この点に注目してみると、表2のとおり79科目については本テキストに準拠していると思われる。しかし、他方で介護福祉士養成施設（142校、計499科目）のうち、シラバス（新カリキュラム）の使用テキストの欄に介護過程のテキスト（T社）の記載があったのは454科目（90.9%）に及ぶが、当該用語の記載があったのは79科目に留まっており、「分析」に係る用語の割合としては決して高くない（表2）。

## Ⅵ. 考察

これまで述べたとおり、例えば「介護福祉士国家試験科目別出題基準」<sup>4)</sup>の「アセスメント」に係る構成要素「分析」に係る用語では、「（情報の）解釈・関連づけ・統合化」（79科目）、「生活課題の分析」（35科目）、「情報の分析」（34科目）、「課題分析」（17科目）など多様な用語が使用されている（表2）。これらの用語が意図することは、いずれも「介護福祉士養成施設の設置及び運営指針」<sup>1)</sup>で示される「生活課題の分析」であると思われる。

このように様々な用語が存在するのは、用語に係る統一的な指標がなく、各介護福祉士養成施設の裁量に委ねられているためであると考えられる。このことは、これらの用語が「介護福祉士養成施設の設置及び運営指針」<sup>1)</sup>、「介護福祉士国家試験科目別出題基準」<sup>4)</sup>、あるいは介護過程のテキスト（T社）に必ずしも準拠していないことを

示すものである。

また、「介護福祉士国家試験科目別出題基準」<sup>4)</sup>では、アセスメントの構成要素として「ニーズ」と「課題」を使い分けているが、両者の意味がどのように異なるのかについては説明されていない。表2では、「課題（ニーズ）」と表記しているものも見受けられるため、学習者の理解を妨げる結果になりかねない。さらに、「介護福祉士養成施設の設置及び運営指針」<sup>1)</sup>と「介護福祉士国家試験科目別出題基準」<sup>4)</sup>においても、それぞれ「生活課題の分析」、「分析」のように用語が異なるが、これらについてもどのような意味で使い分けているのかは説明されておらず、学習者の混乱を招く恐れがある。

このように、何らかの指標、あるいは意図が示されないまま介護過程の展開に係る用語が提示されることは、多様な用語を生じる結果に繋がり、学習者の理解のしづらさや混乱を招く恐れがあるため避けるべきである。このことは、介護福祉が学問として発展途上であるとはいえ、その構築に際して少なからず影響を及ぼしかねない。

そこで、介護過程の展開は介護福祉士の専門性であることを考慮すると、今後の展望として、学習者の共通認識を図るために、用語について一定の標準化が不可欠であると考ええる。一つの選択肢として、「介護福祉士国家試験科目別出題基準」<sup>4)</sup>で使用されている用語を基本とすることは提案に値する。そして、それらの用語の定義を明確に示すことが不可欠である。

本件に関連して、「難解で多様な学術用語を整理・統一し、平明簡易なものとするのが学術の進歩とその正しい普及にとって極めて重要である。一部の学会では、学術用語の見直しに向けた独自の検討を進めている」（文部科学省、2016）<sup>6)</sup>との指摘がある。また、実際の動きとして、認知症の「問題行動」、「行動異常」、「周辺症状」などの用語については、1996年に国際老年精神医学会が統一的な用語として「行動・心理症状（BPSD）」を提唱し、その後、わが国でも普及している<sup>10) 11)</sup>。さらに、看護に関わる主要な用語



の共通認識を図るため、概念的定義、歴史的変遷、社会的文脈を踏まえて標準化する取り組み（例えば、看護職、看護職者、看護者、看護職員の用語を看護職に統一）も見られる（日本看護協会、2007）<sup>12)</sup>。

このような動きは一例に過ぎない。介護過程の展開に係る多様で複雑な用語を平明簡易なものに標準化していくことは、学習者の理解のしづらさや混乱を避けるとともに学問の発展に寄与すると考えられる。

## Ⅶ. まとめ

本研究は、日本介護福祉士養成施設協会<sup>3)</sup>に加入している介護福祉士養成施設（142校、計499科目）を調査対象として、介護過程のシラバス（新カリキュラム）にある授業計画から介護過程の展開に係る用語の実態について明らかにした。

「アセスメント」に関係する用語では、アセスメント（286科目）が最も多かった。構成要素ごとに見ると、「情報収集」については情報収集（235科目）、情報の整理（40科目）の順であった。また、「分析」では、（情報の）解釈・関連づけ・統合化（79科目）が最も多く、次いで生活課題の分析（35科目）、情報の分析（34科目）の順であった。「ニーズの明確化／課題の抽出」については、課題の明確化（46科目）が最も多く、次いで生活課題の明確化（29科目）、生活課題の抽出（27科目）の順であった。

「計画立案」に関する用語では、介護計画の立案（156科目）が最も多く、次いで計画の立案（71科目）、介護計画の作成（36科目）の順であった。また、「実施」に関する用語では、実施（123科目）

が最も多く、次いで介護の実施（39科目）、介護計画の実施（22科目）の順であった。さらに「評価」に関する用語では、評価（196科目）が最も多く、次いで、介護計画の評価（21科目）、介護過程の評価（6科目）の順であった

また、上記の各用語のうち、介護過程のテキスト（T社）に準拠していると思われるものが79科目で確認できたが、残りの用語については何に準拠しているのか明確にすることができなかった。

介護過程の展開に係る学習者の理解のしづらさや混乱を避けるとともに、学問の発展・普及に寄与するために多様で複雑な用語を平明簡易なものに標準化することが不可欠であると考えられる。

## Ⅷ. 結言

本研究をとおして介護過程の展開に係る用語は様々なものが存在することが明らかになったが、果たしてこれらの用語の定義は明確化されているのだろうか。介護過程のシラバス（新カリキュラム）から抽出された用語が何に準拠しているのかを検証するために、「介護福祉士養成施設の設置及び運営指針」<sup>1)</sup>、「介護福祉士国家試験科目別出題基準」<sup>4)</sup>、並びに新カリキュラム用の介護過程テキスト（T社）と比較した。しかし、この3つに留まったため十分な解明までに至らなかったことは本研究の限界である。今後は各介護福祉士養成施設に対するアンケート調査などにより、介護過程の展開に係る各用語が何に準拠し、どのようなねらいのもとで、どのような意味で使用されているのか等について検証することが求められる。

表1.「介護福祉士養成施設の設置及び運営指針」<sup>1)</sup>における介護過程のねらい等

ねらい	教育に含むべき事項	留意点
本人の望む生活の実現に向けて、生活課題の分析を行い、根拠に基づく介護実践を伴う課題解決の思考過程を習得する学習とする。	①介護過程の意義と基礎的理解 ②介護過程とチームアプローチ ③介護過程の展開の理解	①介護過程の展開を通して対象者を理解し、本人主体の生活と自立を支援するための介護過程を実践的に学ぶ内容とする。 ②多職種との協働の中で、介護福祉士としての役割を理解するとともに、サービス担当者会議やケースカンファレンス等を通じて、多職種連携やチームケアを体験的に学ぶ内容とする。 ③対象者の生活と地域との関わりや、地域での生活を支える施設・機関の役割を理解し、地域における生活支援を実践的に学ぶ内容とする。

(出典) 文献・資料1) より筆者作成

表2. シラバス(新カリキュラム)から抽出した用語の分類

( )内の数字は科目数

介護過程の展開プロセス ※( )内は構成要素		用語	内訳(類似する用語を含む)
アセスメント	—	アセスメント(286)	アセスメント(286)
	※(情報収集)	情報収集(235)	情報収集(206) 情報の収集(29)
		情報の整理(40)	情報の整理(30) 情報整理(6) 情報を整理する(4)
	※(分析)	(情報の)解釈・関連づけ・統合化(79)	(情報の)解釈・関連づけ・統合化(46) (情報の)解釈・関連付け・統合化(29) (情報の)解釈、関連づけ、統合(2) (情報の)解釈、関連付け、統合(2)
		生活課題の分析(35)	生活課題の分析(35)
		情報の分析(34)	情報の分析(18) 情報分析(12) 情報を分析する(4)
		課題分析(17)	課題分析(13) 課題の分析(2) 課題を分析する(2)
		情報の解釈・分析(11)	情報の解釈・分析(11)
		情報の解釈(6)	情報の解釈(3) 情報を解釈する(3)
		情報の分析・解釈・統合(6)	情報の分析・解釈・統合(6)

		情報の解釈・関連付け(6)	情報の解釈・関連付け(6)
		分析(4)	分析(4)
		情報の分析・統合(4)	情報の分析・統合(2) 情報を分析し、統合化する(2)
		情報の分析・意味付け・統合(2)	情報の分析・意味付け・統合(2)
		情報の解釈・分析・判断(2)	情報の解釈・分析・判断(2)
	※(ニーズの 明確化)、(課 題の抽出)	課題の明確化(46)	課題の明確化(44) 課題を明確にする(2)
		生活課題の明確化(29)	生活課題の明確化(27) 生活上の課題の明確化(2)
		生活課題の抽出(27)	生活課題の抽出(18) 生活課題を抽出する(9)
		課題の抽出(16)	課題の抽出(13) 課題抽出(3)
		ニーズの抽出(4)	ニーズの抽出(4)
		課題(ニーズ)の明確化(2)	課題(ニーズ)の明確化(2)
		ニーズの明確化(4)	ニーズの明確化(2) ニーズを明確にする(2)
		ニーズの確定(2)	ニーズの確定(2)
	計画立案	介護計画の立案(156)	介護計画の立案(109) 介護計画立案(25) 介護計画を立案する(22)
		計画の立案(71)	計画の立案(36) 計画立案(35)
		介護計画の作成(36)	介護計画の作成(16) 介護計画作成(12) 介護計画を作成する(8)
		個別援助計画の立案(16)	個別援助計画の立案(10) 個別援助計画を立案する(6)
	実施	実施(123)	実施(123)
		介護の実施(39)	介護の実施(39)
		介護計画の実施(22)	介護計画の実施(20) 介護計画実施(2)
		介護実践(9)	介護実践(9)
		計画の実施(7)	計画の実施(3) 計画実施(3) 計画を実施する(1)

評価	評価(196)	評価(196)
	介護計画の評価(21)	介護計画の評価(16) 介護計画評価(5)
	介護過程の評価(6)	介護過程の評価(6)
	個別援助計画の評価(2)	個別援助計画の評価(2)

(注意) ・表中の太枠で囲んだ用語は、紙幅に限りがあるため2科目以上のものを記載。  
・表中の介護過程の展開プロセス及び構成要素は、文献・資料4)の小項目から引用。

表3.「介護福祉士国家試験科目別出題基準」<sup>4)</sup>における介護過程の展開に係る用語

大項目	中項目	小項目
1 介護過程の意義と基礎的理解	1)介護過程の意義と目的	・介護過程展開の意義
	2)介護過程を展開するための一連のプロセスと着眼点	・ <u>アセスメント</u> (意図的な <u>情報収集・分析</u> 、 <u>ニーズの明確化・課題の抽出</u> ) ・ <u>計画立案</u> (目標の共有) ・ <u>実施</u> (経過記録) ・ <u>評価</u> (評価の視点、再アセスメント・修正)
2 介護過程とチームアプローチ	1)介護過程とチームアプローチ	・介護サービス計画(ケアプラン)と介護過程の関係 ・他の職種との連携 ・カンファレンス ・サービス担当者会議
3 介護過程の展開の理解	1)利用者の状態、状況に応じた介護過程の展開	・自立に向けた介護過程の展開の実際 ・事例報告、事例検討、事例研究

(出典) 文献・資料4)より筆者作成



## <文献・資料>

---

- 1) 「社会福祉士養成施設及び介護福祉士養成施設の設置及び運営に係る指針について」社援発 0306 第 21 号. 令和 2 年 3 月 6 日.
- 2) 「介護福祉士の専門性」日本介護福祉士会のホームページ  
(<https://www.jaccw.or.jp/about/fukushishi/senmon>) (2022 年 11 月 30 日閲覧)
- 3) 安瓊伊 (2014) 「介護福祉士の専門性の構成要素の抽出－介護福祉士養成施設の介護教員の自由記述の内容分析に基づいて」『老年社会科学』35 (4), 419-428.
- 4) 「介護福祉士国家試験科目別出題基準」社会福祉振興・試験センターのホームページ  
([https://www.sssc.or.jp/kaigo/kijun/pdf/pdf\\_kijun\\_k\\_no35.pdf](https://www.sssc.or.jp/kaigo/kijun/pdf/pdf_kijun_k_no35.pdf)) (2022 年 12 月 1 日閲覧)
- 5) 『介護福祉士国家資格取得に向けた留学生指導についてのガイドライン (改訂版)』日本介護福祉士養成施設協会. 11-12. 令和 5 年 3 月.
- 6) 「学術用語の標準化について」文部科学省研究振興局学術研究助成課. 平成 28 年 8 月 9 日.
- 7) 遠藤織枝・三枝優子・三枝令子 (2016) 「介護用語の表記の統一のために」『介護福祉学』23 (1), 47-53.
- 8) 青柳佳子 (2019) 「介護福祉士養成教育における外国人留学生に対する介護用語の課題－科目「介護過程」の国家試験問題と養成テキストの比較からの検討」『介護福祉学』26 (2), 98-106.
- 9) 「会員一覧」日本介護福祉士養成施設協会のホームページ  
([https://kaiyokyo.net/member\\_data/index.html](https://kaiyokyo.net/member_data/index.html)) (2022 年 11 月 20 日閲覧)
- 10) 山本晴保 (2018) 「BPSD の定義、その症状と発症要因」『認知症ケア研究誌』2, 1-16.
- 11) 高橋智 (2011) 「認知症の BPSD」『日本老年医学会雑誌』48 (3), 195-204.
- 12) 日本看護協会 (2007) 『看護にかかわる主要な看護の用語の解説－概念的定義・歴史的変遷・社会的文脈』, 1-52.